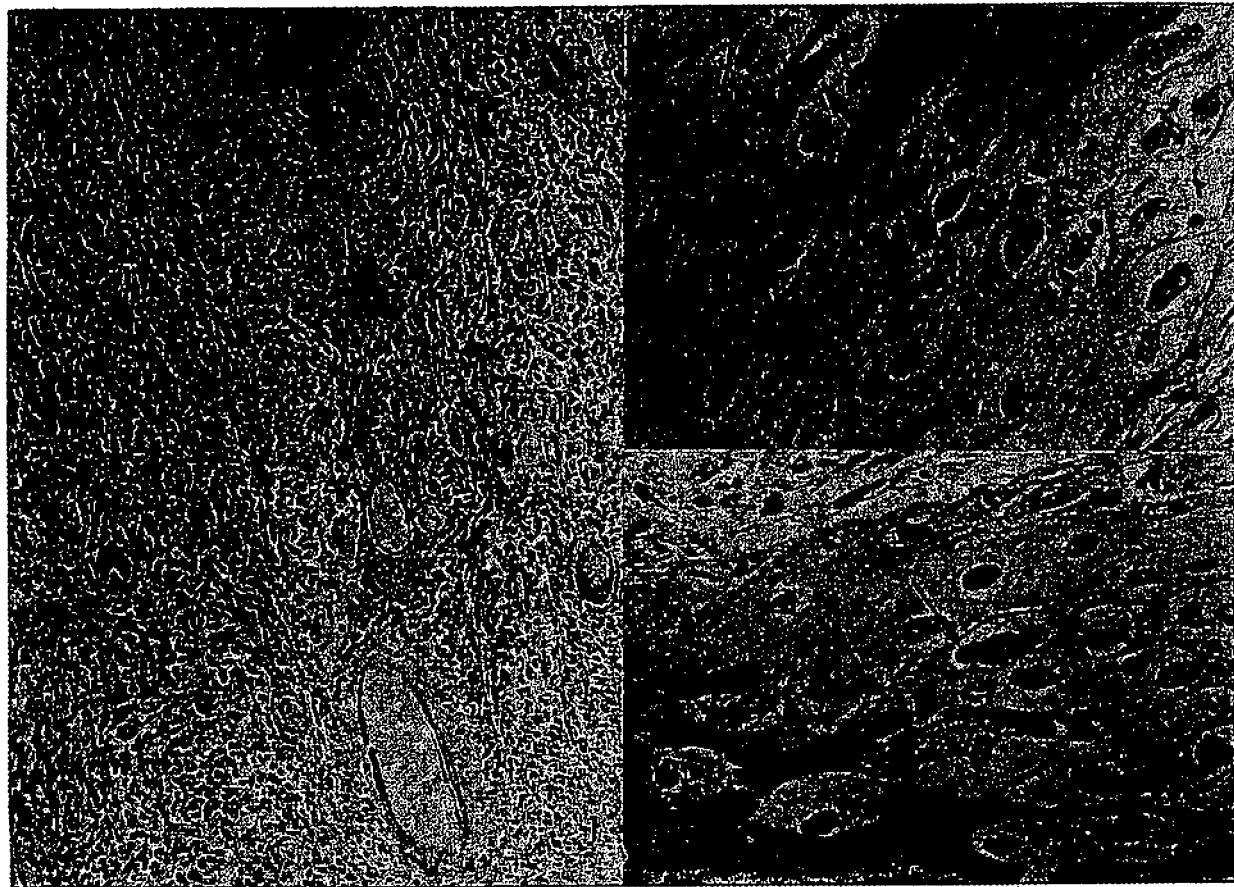


オタリアの皮膚 Seal pox

北海道大学比較病理学教室出題

第18回獣医病理学研修会標本No. 288



動物：アシカ科オタリア *Otariidea Otaria flavescens*, 幼獣 (体重30kg)。

臨床所見：1975年8月本州より3頭のオタリアが小樽市内の水族館に移入された。その当時動物の異常には気付かれていない。その後3頭共、顔面を含む全身に拇指頭大に至る大きさの硬く触れる腫脹部が多発し、それに脱毛、糜爛、出血を伴うものも存在した。同年9月3日、その内3ヶ所を切除し、ホルマリン液固定の上某獣医師を通じて当教室に持ち込まれた。

肉眼所見 (固定後)：隆起部の皮膚表面は脱毛し、白色を帯びた茶褐色の痂皮をつけていた。剖面、表層は約1mmの厚さに茶褐色を呈し、その部には幅0.5mmの白色柵状構造物が表面に直角に多数配列していた。表層茶褐色層の下の組織は灰白色で均質性であった。

組織所見：表皮は糜爛ないし潰瘍を示し、真皮に組織球形細胞、線維芽細胞、大食細胞及び好中球からなる高度の細胞浸潤・増殖が見られた。潰瘍部の真皮表層は出血及び壊死を示し、球菌及び桿菌の集塊も認められた。毛包、特に結合織性毛包は亜急性の炎症巣を形成し、時に膿瘍形成も認められた (図1, H・E, X120)。さらに真皮の比較的表層で毛細血管の新生があり、毛細血管内皮細胞、壁細胞の増殖が認められ、ミトーゼを伴っていた。

以上から真皮は急性ないし亜急性の真皮炎とみなされた。

毛包外根鞘並びに表皮有棘細胞を中心とする上皮性の細胞に細胞質及び核内封入体形成が認められた。細胞質は腫大し、空胞変性におちいり、好酸性ないし好塩基性の大型の細胞質封入体が各細胞に1ないし数個認められた (図2, 3, 細矢印, H・E, X480)。又好酸性顆粒状のもの、微細顆粒の彌漫性のも、細繊維の網目状になったものも認められた。核は腫大し、核壁濃染し、その中に微細顆粒状ないし均質の好酸性核内封入体を認めた (図2, 太矢印)。組織化学的検索 (ホイルゲン, メチルグリンピロニン, アクリジンオレンジ染色) の結果、細胞質封入体はDNA陽性を示した。以上から本例は皮膚病変並びに封入体の特徴からボックス群ウイルスの感染が疑われ、さらに動物が海獣であることから「オタリアの皮膚 Seal pox」と診断された。

尚パラフィンブロックから封入体に一致する部位を切り出し、電顕的に検索した結果、細胞質封入体はウイルス粒子を含む電子密度の高い物質の塊であった。ウイルス粒子は300×140nmの回転楕円体でバラワクシニアウイルスの特徴をそなえていた。一方核内封入体はちぢれた細繊維の束よりなっていた。